

香雪美術館所蔵『二河白道図』に関する一考察 — 図様と構図からみる主題表現について —

The *Nlga Byakudo-zu* in the Kosetsu Museum: An Analysis of the Iconography and Composition of a Narrative Buddhist Painting in Medieval Japan

深町聡美

FUKAMACHI Satomi

*

Key Words : 二河白道図、仏教説話画、構図

1. はじめに

『二河白道図』には、「穢れたこの世から極楽浄土に向かうため、三寸の白い道を行き火の河と水の河を渡り、そして無事に極楽に往生する」という物語が描かれている。この仏教説話画は鎌倉時代以降に、主に浄土系仏教の中において多数制作されていた絵画で、現在十数点の現存が確認されている。ここには約 20 前後の図様が画面に配置されており、これにより仏教教理に則した物語を描いている。この物語は中国初唐期の浄土教思想家、善導が著した『観無量寿経疏』に説かれた「二河譬」を原典としている。「二河譬」をはじめとした『観経疏』で説かれた善導の思想は、日本において浄土教思想が広まるにつれ広範な影響を及ぼすようになった。特に鎌倉時代に法然が『選択本願念仏集』で観経疏をほぼそのままの形で引用し、法然の弟子であった親鸞も著作『教行信証』で「二河譬」を引く他、時宗の開祖である一遍も影響を受けている。こうして鎌倉以降、法然をはじめとした仏教僧によって広く認知させられたのに合わせて、数多く制作されるようになっていった。

『二河白道図』に描かれた図様は他の経説から伝統的な図様を引用するものであり、また時代的な思想を反映させることで多量の情報が織り込まれてきたものである。宗教的意味を持つ図様の意味が多重化することで鑑賞者へ伝達される。加須屋誠は『二河白道図』について「語り」「飾り」「祈り」の三点から分析し、主導的な役割を果たした指導者の意図や聴聞集の指向が反映された画面構成であることを示した。

香雪美術館所蔵の『二河白道図』は、同時期に制作されたものと比較すると、最初期の作例である光明寺本から正面構図を引き継ぐも、図様が多く書き加えられ、仏教教理の伝達が重視される構成をとっている。これは主題を解説する制作者の意図であり、依頼者にはそうさせざるを得なかった背景があったのではないかと筆者は考え、図様と構図の表現の研究を進めることとした。

2. 本研究の目的と研究方法

本研究は、香雪美術館所蔵の『二河白道図』の図様及び構図を分析することによって、この絵画が鑑賞者に与える視覚的影響が如何なるものであるかを調査することを目的とする。

研究方法として、まず仏教説話画の歴史的背景及び利用目的を示す。これによって、『二河白道図』が有する「民衆への仏教教理の伝達」という必要性を明らかにする。次に思想的背景である鎌倉新仏教の思想を、法然、親鸞を中心に探る。そして両背景を主題として定義し、それを表現する為に用いられている手法を、部分と画面全体に分けて分析する。研究に際して『二河白道図』の図様解釈や

典拠に関する研究を中心に、説話画の鑑賞法や仏教美術史等の先行研究を検討した。

3. 本論文における『二河白道図』の主題

伝来から鎌倉時代までにおける仏教の社会的需要と仏教説話画、絵解きの目的をまとめた結果、仏教説話画は、古くから大衆教化のための有効な手段として利用されていたことから、各時代に、仏教の思想を民衆に流布せねばならない理由が存在していることが確認できた。『二河白道図』もそれらの系譜の上で作成されていることが分かる。また、鎌倉新仏教の祖師たちの思想を追うことにより法然ならば専修念仏、親鸞は絶対他力等の思想を生み出しており、『二河白道図』の背景にある宗教的思想を理解した。

4. 図様と構図による表現



主題を表す図様を、構図配置を中心にして部分と全体に分けて分析した結果、視点の誘導によって感覚的に思想を伝達している事が分かった。一例として、下方に配置されたこの世は、視点を左右に誘導するような構図がとられている。これは俗世間の煩わしさを直感的に伝えている。一方で上方に位置する極楽浄土は左右対称の、秩序的な形を作ることで精神的安定感を表していると考えられる。

以上の他、絵画の全体像を見たときに、絵解きでの解説がなされ

(図 1) 二河白道図 香雪美術館本なくとも主題を伝達が可能な構図で描かれていると考えられる物が散見出来た。

5. おわりに

香雪美術館本は、絵解き用絵画としての役割を構図と構図によって完備しつつ、鑑賞のみ行った場合でも感覚的に主題を実感させるよう構図的に工夫が凝らされていることが見えてきた。この絵画は絵解きの用途に特化した結果、主題表現に説得性を付与している。これにより鑑賞者に一層、主題へ向けての心理的影響を及ぼしていると筆者は考察する。香雪美術館本での仏教教理の伝達が重視された構成は、鑑賞、装飾用としての立場以上に説話画としての価値を有した、解説に先行して教理を理解できる作品といえるだろう。